

エリート上司は求愛の機会を逃さない

自分の機嫌は自分で取る。

極論かもしれないけれど、社会人四年目にしてそれを悟れたことは幸運だった。

入浴後、髪の毛を乾かし終わった近内菜々美は、ブラシで髪を梳きながら、手元にあるスマートフォンで時間を確認する。

二十二時、至福の時間の始まりだと頬を緩ませた。

床に落ちた髪を素早く掃除し、電気を消してベッドに潜り込む。暗がりの中で見るスマートフォン画面からの光が眩しい。——そんなのは、ちっぽけなこと。

「今日もお世話になります！」

イヤホンをして、画面を左に四回スライドし、アプリアイコンが一つしかない画面を出す。他人に万が一にも見られないための自衛の策だ。

このスライドが儀式のようなものになっていて、気分を高揚させてくれる。目当てのアイコンをタッチして、『褒め褒めボイス』アプリを起動させた。

イケボイスがひたすら自分を褒めてくれる、至高の時間をくれるアプリだ。

しかも同じ空間にいるような音響効果を表現する、バイノーラル録音で配信されている。低い美声に耳元で囁かれる感じが、もうとんでもなく、いい。

このアプリを知ったとき、こんな寂しいことで自分を慰めているのはどこの誰だと思った。興味本位でダウンロードして、聞いて、すぐにわかる。

きつと、世の中には、自分みたいな女が多いのだ。

その『どこの誰』になるのに、一時間もかからなかった。今やヘビューザーだ。

今日一日を思い返ししながら、欲しいセリフを購入済の『イケボイス一覧』から探す。今一番聞きたい言葉を選ぶのがこのアプリの魅力だ。

選択して再生をタップする。

低くて、力強くて、優しい、イケボイスの吐息が聞こえると、無意識にイヤホンを耳穴にしっかりと押し込んだ。

『姫』

心を溶かす声に、菜々美は目をぎゅっと瞑る。

『今日も一日お疲れ様でした。……少し、お疲れのように見えます。明日はお休みをしてもいいのではありませんか』

「飲み会が……。滅多にこない部長が参加するから行かなければいけないの。良識ある社会人として参加せざるをえない飲み会……休めない……」

アプリの自動音声相手に返事をしてしまった。

休めるものなら休みたい。混んでいない美容室でゆったりと髪を切りたいし、歯医者にも行きたい。カフェでゆっくりと読みかけの本を読みながら、美味しいコーヒーをじっくり味わって飲みたい。

疲れた身体に鞭打って働くこの身が空しくなるときはある。

脱・社畜を叫び仕事を辞める友人はいるけれど、自分は雇われて稼ぐタイプで、会社という組織には感謝をしていた。

そして現実的な話、有給休暇届を出していないから休めない。

朝一番に上司に風邪だと嘘をつくのも面倒だし、なんととっても忙しい日々が続いていた。明日休んだらそのしわ寄せが一気に押し寄せてくる。

イケボイスに入り込みきれない自分を悔やみつつ、次のセリフを待つ。

『フウ……。いつも姫は頑張り過ぎですね』

心に触れられて、目の奥がじわりと熱くなった。

『でも、そうやって、やるべきことから逃げない姫の凛とした後ろ姿は、誇り高く、美しいです』月曜日からの笑顔を貼り付け続けた毎日がぼつと脳裏を通り過ぎて、目からはらりと涙が零れる。

『明日はとびきり美味しいコーヒーをお淹れしましょう。姫は一人ではありません。私はいつも見守っておりますから。でも、どうか、無理だけはおやめくださいね』

イケボイスはそこで終わった。

無機質な、不特定多数に配信された、作りこまれたシナリオとはいえ台本を読んだだけのボイス

にここまで癒される。

菜々美は合掌した。

「声優さんと技術の進歩に感謝」

いつのまにか涙は乾いている。

菜々美は身を起こして、新しいイケボイスを探し始めた。サンプルボタンの横には金額が表示されていて、セリフが長ければそれだけ高い。

ホストにお金を使う女の人の気持ちは、きつとこれなんだろう。イケボイスのために働いている気がしなくもないが、それもまた人生だ。

「あ、なんかこれいいかも」

いくつかサンプルを聞いた後、ピンときたものを買う。こういうときにあまり迷わないのが自分のよいところだ。

『私もいつも見守っておりますから』

イケボイスの優しいセリフを頭の中でリピートして、胸にじわじわと温かいものが広がるのを感じる。

会社の人には、実は『守りたい』願望のある女だなんて死んでも知られたくない。

自分を守るのは自分だ。けれど、妄想の中でくらい、守られることに浸りたいじゃないか。

イケボイスの子守唄効果はすごい。

せっかくだウンロードしたイケボイスを聞く前に、菜々美は眠りに落ちていた。

見渡しても人ひとりいない、がらんとした二十時のオフィス。

菜々美は会社のホームページに載っているイケオジ社長の笑顔の写真を、頼杖についてぼんやりと眺めていた。

今日は滅多に飲み会に参加しない部長、鬼原隆康きばらたかひさが参加する懇親会がある。菜々美も出席する予定で、飲み会代も支払い済だ。開始は十九時。だが菜々美はまだ一人、オフィスにいる。

目頭めがしこを押さえながら、椅子に背中をもたせかけた。

今日は女子社員の化粧が念入りで、お酒落しゅれをしている人も多かった。そう思い出しながら、頭を横にゆっくりと倒し肩を揉んだ。

彼女たちは、部長、鬼原隆康、独身、三十二歳、イケメン、高身長、筋肉質——を狙って、民族大移動のごとく、オフィスから居酒屋へと消えてしまった。

「あ、お金もあるのか」

そこは重要だろうな、と呟きながら菜々美は椅子に座り直して、表計算ソフトを画面に出し、デスク上の見積書に目を落とした。

天に二物も三物も与えられた部長とは違い、菜々美は、面倒だという理由だけで染めない黒い髪と、大きめな目が特徴なだけ。日本人女性の平均身長で、細身な方。ある程度、整った顔で産んで

もらったおかげで、化粧と服装は社会人らしさと清潔感第一というスタイルで乗り切ることができている。

基本インドアな自分には、華々しい部長は崇拜の対象だ。そうは言っても、崇拜もしたことはないのだけれど。

この株式会社キハラハードに席を置き、鬼原、という名字を聞けば、まず連想するのは代表取締役社長だ。

同じ名字を持つ人間が部長としてやってくる。そんな人事の話が広がったのは四年前、すぐに縁故だと噂になった。

菜々美はまだ新入社員の頃だったが、本当に社長の甥だとわかると、社内がかなりざわついたのを覚えている。

この株式会社キハラハードは現社長が若かりし頃に興し、ハードウェア分野で成功を収めた大企業だ。時代の流れで今ではソフトウェアやウェブ関係も手広く手掛けている。

そんな会社に鬼原隆康は、二十八歳で部長としてやってきた。上でどんな話し合いがなされたかは知らない。

けれど、昭和生まれの頭の固い取締役も多いし、かなり荒れたのではないのかと今なら想像できる。

鬼原隆康が入社してきても、菜々美は仕事を覚えるのに精一杯で、噂話に花を咲かせる時間もなかった。

それでも、様子見だった社内の彼の評価が、いい方向に変わったのはすぐに気づいた。

隆康が指揮を執ったゲームのアプリ開発事業が非常に伸びたのだ。

よくよく聞けば、彼は海外の大学在学中にベンチャー企業を立ち上げていたらしい。それをうまく軌道に乗せたのを知った社長が、その手腕を手に入れるべく引き抜いたようだ。

どれもこれも噂で、何が本当かは菜々美は知らないし、そんなに興味もない。

ただ、当然彼は憧れの的で、空席の彼女・妻の座を狙う女子が大勢いるのは知っている。

菜々美は見積書に記載されている今年入社の新入社員『舛井萌咲』の名前を爪でコツコツと弾く。この見積書を作った萌咲もその一人だ。

菜々美がいるのは、取引先にソフトを売り、ハードなどを一括でリース提供をして保守契約を担当する課になる。

契約の更新時に、変更点があるかどうかなどを確認する。変更点があった場合はもちろん、取引先に新しい見積書を見せなければならぬ。

その見積書のおかしな数字に気づいたのが菜々美の運の尽きだった。

『でも、もう飲み会に行かなくちゃいけないんで』

どうしようかと悩み抜いてから、やんわりと萌咲に型番と数字の間違いを指摘したときにそう言われた。

今日は金曜日だ。月曜日に課長に確認してもらい、火曜日の朝から取引先に持っていく書類が間違っている。

それをわかっていて飲み会に行くのはいい。ならば、土日に出勤をするのだろうか、と聞いてみた。

『え。休日は休みます。月曜日に課長に確認してもらいまーす。もし課長も気づかなかつたら、間違っていないことですよね』

てへ、と笑っていたが、悪い冗談だと聞き流す。

月曜日に上司に最終確認をもらう前に、穴が開くほどに見直すべきではないだろうか。

『課長、私には優しいから直してくれると思います。それに、私たちが残業するのってよくないですよね』

残業ゼロを目標として掲げてはいるが、時期によってはなかなか減らない現実もある。

これは最近残業続きの菜々美への嫌みだろう。

でも、本当の問題はそこじゃなかった。このままでは問題が起ると知っていて何もせず休日には突入できない自分の性格なのだ。

萌咲の仕事の面倒を見るのは、菜々美の仕事ではない。

ただ、この取引先はつい最近まで自分が担当していたから気になった。契約更新の見積もりについて、前担当者である自分に萌咲はまったく質問に來なかつたのだ。

もつと早くにこちらから声を掛けるべきだったと後悔しても遅い。

取引先の担当者はとてもいい人で、新人でまだ余裕のない自分をいろんな雑談で和ませてくれたり、仕事を教えてくれたり、本当にお世話になったのだ。

「はあ……」

溜息を吐きながら、料金改定前のソフトやハードの金額が並んだ見積書を眺める。

萌咲は少し鼻にかかった甘ったるい声で「これ、お願いできますかぁ」とよく言っている。それが男心をくすぐるようだ。

あれを聞く度、新入社員だった自分を思い返す。

なんでも自分でこなそうと頑張っていたのは、間違いだつたのだろうか、つい考えてしまうのだ。

この見積書の雛形は菜々美が持っていて、それを使えば三時間もあれば終わる。けれど、本人にさせるのが一番だ。それが正しい、手を出すべきじゃない。

そう思ったから、気を使って内密に課長に報告をした。

返ってきたのは『正しい見積もりを作っておいて』というお願い。

「飲み会代……で、新しい褒め褒めボイスが、五つはお買い上げできるのに」

ああ、と菜々美は髪をひとつに留めていたバレッタを外し、鎖骨までの長さの髪を解いた。母親譲りの特に何もなくても艶のある髪には感謝だ。

それを束ねることで、オンとオフを切り替えている。

菜々美は机に腕をつき、頭を抱えて髪をかき上げた。

歓送迎会以外は基本的に行かないのだから、懇親会という飲み会に参加しなくても問題はない。

今回も、たまには顔を出すかと少し気が向いただけで、どうしても行きたいわけではなかった。

けれど、理不尽さが悲しい。

もうこれはイケボイスを買うためだけに働いていると考えるしかない。

「あ……」

はた、と菜々美は顔を上げた。昨夜、買ったボイスを聞いていない。くるりと身体を反転させて、周りを見渡す。

自分のいるデスクラインの上にだけついている蛍光灯。がらんとしたオフィス。光のない向こうの暗闇から何か^はが這い出て来そうなシチュエーション。

菜々美はごくり、と生唾^{なまつば}を呑み込んだ。

——誰もいない。

理不尽の対価として、少しくらいいいはずだ。

菜々美はバッグからイヤホンを取り出すと、スマートフォンに差し込み、素早くアプリを起動させた。

『姫』

低くて心に染み入る声^しが耳から流れ込んできた瞬間、大きな目に生気が戻り、菜々美は見積書を確認し始める。

『今日もお仕事、お疲れ様でございます。いつも仕事に対する姿勢、素晴らしいですね。私はそんな姫をお慕いしております』

固くなっていた表情が柔らかく溶けた。きつと頬はピンク色に染まっている。

声^{よみか}に導かれるように蜂蜜由来のリップを塗ると唇がふつくらとした。ささくれていた心にやる気が蘇^{よみが}ってくる。

我ながら現金だと思いが、残業を頑張ろうという気になった。

そして残業代でボイスを買う。

キツ、と眼光を鋭くし、菜々美は仕事のスピードを上げた。

見積書の間違いやすい箇所はだいたい目を付けていた。ハードやソフトの料金改定後の一覧は社内^のファイルから取り出せばいい。

一年前の契約の更新なので、料金と税金を計算し直す。表計算ソフトに計算式を入力すれば間違いのない数字が出る。それをコピーして……

やることはいつもと変わらない。間違いのないように細心の注意を払って、淡々とこなすだけだ。

『……姫は頑張りすぎですね。ほら、肩が強張^{こち}っていますよ』

「うん、痛いくらい……」

声に吐息が交じり体温を感じるほど、イケボイスが心に近づいてくる。このバイノーラル録音の素晴らしいところは、すぐそばにいてくれると感じさせてくれるところだ。

イケボイスに癒されながら、ハードとソフトの型番を確認し、金額をコピーしてソフトに貼り付けていく。

『姫がお許しくださるなら、肩をお揉み致します。……許可を頂けるのですね』

「いや、もうほんとにお願いしたいです」

アプリに返事をしてしまうほど、肩凝りはひどい。

マッサージュに行ったところで解消されないし、担当者にひどい肩凝りのお墨付きをもらって帰ってくるだけだ。

『姫、失礼します』

「お願いします」

せめて気分だけでも味わおう。

肩から力を抜いて声に身を委ねたとき、誰かの指先が自分の肩に遠慮がちに触れた。

「ひっ！」

灯りの消えたオフィスの暗がりだが、菜々美の脳裏に蘇る。

ぼうっと生気のない警備員が白い制服を着て近づき……想像が膨らんで、菜々美はびくうっと身体を震わせて立ち上がった。

耳からイヤホンが取れて、スマホに繋がったままデスクからぶらさがる。デスクにイヤホンがぶつかる無機質な音が耳に届いて、イケボイスの世界に入り込んでいたことに気づいた。

「……そこまで驚くか」

「は……え、あ、え？」

苦笑いを抑え切れない、そんな表情で、鬼原隆康が菜々美の横に立っていた。

夜だというのに疲れた様子がまったくなく、マンガから出てきたようなイケメン部長だ。

「残業？」

パソコンの画面を覗き込まれて、デスクの上に置いていたスマホを慌てて取り上げる。イヤホンを手繰り寄せて、涼しい顔をした。

スマホ画面にはイケボイス声主のイメージイラストが表示されているのだから、死んでも見られるわけにはいかない。

「ぶ、部長は、なぜここに」

「会議の後に、社長に呼び出されて、この時間」

イヤホンをして残業をしていたのを、よりによって部長に見つかったという焦りよりも、イケボイスが漏れているのではないかと気が気でない。

「なに、見積もり？」

隆康は真剣な目でデスクの上の見積もりと、画面の見積もりを見比べ始めた。

涼しげで知的な目元、すっと通った鼻筋、少し下唇が厚みがあって張りのある唇。間近で見ていると、本当にきれいな顔立ちだなと思った。

隆康と話した機会は数えるほどしかない。覚えてもないような、とりとめもない会話。彼は近寄りがたく、住む世界が違う人だ。

こんな人気者と二人きりの状況を目撃されれば、確実に誰かに恨まれる。

何よりも、アプリを終了させたい。菜々美はそれとなく隆康を誘導した。

「……飲み会、行かれないんですか」

「行くけど、それを言うなら近内さんもだろう。行かないのか」

「見積もりを終わらせてから」

「この会社の担当、舛井さんに変わった覚えがある」
デスクの上の見積書を閉じ、表紙を確認し、「ほら」と隆康が視線で言ってくる。柔らかく茶色がかった髪が、彼の額で揺れた。

本物のイケメンだ、と見惚れかけて、はっとする。

隆康はこうやって無意識なのか意識してなのか、女子社員を籠絡しているのだ。まったくもって、罪深い。

菜々美は心に何重もの壁を張り巡らせつつ、飲み会へ誘導を続けた。

「素晴らしいです。全て把握していらっしやるんですね。で、飲み会……」

飲み会の勧めを無視して、隆康は顔を顰めた。

「数字が違うな」

「ええっと、はい、そうです。課長には伝えたのですが、訂正を託されたので、残業になりました。どうぞ部長は飲み会へ行かれてください」

アプリのイケボイスは隆康の耳には届いていないらしい。ほっとしながらも、菜々美はアプリを終了したくてうずうずしてしまう。

部長と喋っているのに、スマホを扱うのはよくない。だが、段々と菜々美に落ち着きがなくなってくる。

「で、イヤホンで音楽を聴きながら、残業」

注意するような口調ながらも険はない。が、部長から指摘をされて開き直れるほどの強さは菜々美にはない。

「すみません……」

俯いたまま、手の中に握り込んだスマホ画面の、アプリの停止ボタンを親指でそつとタッチした。

一瞬だけ、ちらりと隆康を上目遣いに盗み見る。呆られているかと思いきや、興味深そうな表情を浮かべて、菜々美を見下ろしていた。

「近内さん、感じが違う」

「以後、社内でイヤホンはやめます」

金曜日の夜に他人の仕事の尻を拭う残業をしているのだ。

少しくらいはハメを外して、イケボイスに褒められながら残業したくもなる。

モヤモヤを抑えつつも、社会人として頭を下げた。

「いや……、『雰囲気』の話」

隆康は顎を手で撫でながら、肩を竦める。

「もっと、こう、近寄りがたい感じだろ、いつも」

「はあ。髪、ですかね」

確かに菜々美は社内でプライベートの話はしないし、飲み会の常連というわけでもない。いつもと違うのは、解いている髪くらいだろう。

そもそも近寄りがたいのは隆康の方だと思う。飲み会に滅多に参加しないという共通項はあるが、

彼は社内での地位、イケメン度ともにかなり上。

「飲み会、皆さん部長を待ってますよ」

よく掴めない会話を続けるのも息苦しく、ちらりと壁にかかっている時計で時間を確かめる。二十時ちよつと過ぎ、まだ飲み会には間に合うはずだ。

「音楽を聴いていたんじゃないかと、彼氏と電話してたのか」

「彼氏はいません」

「へえ。——これはセクハラだな、悪かった」

ハラスメントの規定が厳しくなり、プライベートを聞くことも難しい昨今だ。だが、今はそんな風潮もありがたい。

隆康はあまり信用していない、といった顔でまた見積書に目を落とした。どうやら彼の中では、菜々美には彼氏がいて、その彼と喋っていたということになったらしい。ということはおそらく、独り言を聞かれていたのだろう。

よほど大きな独り言を言っていたのかと思うと、恥ずかしい。

だが、アプリの存在を知られるよりはまし。

菜々美は誤解を受けたままにしようと決めた。

おそらくまだ飲み会に行っていない部下を気にしたのだろうが、残業になったから彼氏に迎えを頼む電話をしていたとも思っていてくれれば、隆康も飲み会に向かってくれるだろう。一人ではつつとしていると、隆康は椅子を隣のデスクから持ってきた。

「手伝う」

「えええ……」

すぐく嫌そうな表情と声が出て、菜々美は手で口を押さえる。驚いたように目を見開いた隆康は、すぐに笑い出した。

「早く終われば、彼氏と会えるだろう」

「はあ」

彼氏なんてものはないが、早く終われば、褒め褒めボイスがたくさん聞ける。ぐらりと、と菜々美の心が揺れた。

「二人でやった方がミスも減る」

やり直して作った見積書をさらに間違えれば……。萌咲の勝ち誇ったような顔がありありと想像できて、菜々美はげんなりとした。

「……飲み会はどうするんですか。皆さん、お待ちだと思えます」

「部下が飲み会に参加できなくなる、そんなマネジメントをしているのは、部長である俺だ」にやり、と浮かべた隆康の悪戯いんぎんっぽい笑みにどきりとする。

「つまり、俺の責任なんだよ」

萌咲は隆康が来るからと言って飲み会に行った。逆恨み的にいえば、今の状況は隆康が元凶だ。その元凶が責任を取ると言っている。

意識が高い上司だと感動はするが、これを萌咲が知ったらどうなるだろうか。

部長が手伝ってくれるなら自分で見積書をやり直したのにと、恥も外聞もなく言いそうだと、自分が責められることも想定できる。

どうにもこうにも、萌咲とは仲良くなれそうにない。

菜々美が返事をしないでいると、隆康は椅子に座って見積書に本格的に目を通し始めた。

「先輩に引き継いだ仕事が気になった。取引先に失礼がないか確認をしたかった。そこでミスを見つけ、担当と直属の上司に報告をした。だが、なぜかその仕事を任せられた。そんなところだろう。近内さんはちゃんと仕事をしている。俺はやるべきことをやっている人間は助けると決めている。それだけだ」

菜々美の胸がとくん、と高鳴った。

これは、遠回しに褒められてはいないだろうか。心臓がどきどきとうるさく鳴り始める。

隆康の声は低く、心の奥底まで響いてくる。イケメンの安定の重低音ボイスが生で聞いているという現実には、菜々美の心は前のめりになった。

彼の隣の椅子に菜々美はゆっくりと腰を下ろす。もっとそばで聞きたいという欲に負けて、ストレートに聞いた。

「……褒めて、くださってます？」

「褒める？」

隆康は困ったように、眉根を寄せた。

「ちゃんとやっている、というのが、それに当たるのなら」

「……ありがとうございます」

期待していなかった生の褒め言葉。内心では空高く舞い上がっていて、それを表に出さないようにするために、表情を引き締めた。

「手伝っていたら、助かります」

俄然、仕事をやる気になる。

部下の士気を上げるのが上手な、なんていい上司なのだろう。

菜々美はスマートフォンからイヤホンを抜いて片付けようとした。

イヤホンを抜けば音は停止する仕組みになっている。さっき、アプリは停止させたから、完全に音は鳴らない。

けれど、どこかでまだ安心を求める気持ちがあったのか、止まっているアプリを、さらに止めようと指を動かし、無意識にタップしてしまう。

その瞬間、その場が地獄と化した。

再生を押したのだ。

『姫』

スマートフォンから音声が流れて、菜々美は凍り付く。

『いつも頑張っているから、私は誇りに思っています』

静かなオフォースに音声が続く。真顔の隆康と目が合った。その目はじっと菜々美を見ている。

『しかしですね、姫はいつも頑張りが過ぎていて、心配になります』

震える手でアプリを終了させようとしているからか、指先がすっかり冷え切ってしまったせいか、まったく停止してくれない。

『抱き締めて差し上げた——』

やっと止まったが、安堵はできない。時間はアプリのようには戻せないのだから。

瞬きもできなければ、この壊れた空気を修復する気の利いた言葉も出てこない。

菜々美の精神が粉々に砕けそうになったとき、隆康が口を開いた。

「このハードの金額だが……」

足を組んで、何事もなかったかのように振舞ってくれる隆康の腕を、菜々美はがしつと両手で掴む。

「もう、ほんつとに、そこは、スルーしないでください。罵ってください。馬鹿にしてください——」

「大丈夫だ、何も聞いていない」

「そんな見え透いた嘘はやめましょうよ。聞こえましたよね！」

涙目で隆康に訴える。笑うなりして欲しい、そして誰にも言わないで欲しい。

縋る菜々美に、隆康は笑いを堪えるように目を細めた。

「気にしないでいい、——姫」

「いい、いいわる」

菜々美は手で顔を覆って座ったまま前屈みになる。恥ずかしさが突き抜けてもう自分の感情がわ

からない。

「姫、仕事だ、仕事」

隆康の口元から悪戯な笑みは消えていない。そんな顔でパソコンを見つめたまま、姫だなんて口にされてしまえば、もう穴を掘ってでも入りたくなくなった。

「姫じゃないので、そこはどうか勘弁してください」

「姫でいいじゃないか。今、手伝われてもミスが多くなるから、そこで見学してくれ」

その通りだと思ふ。クールな判断をする隆康が恨めしい。いや、それよりも会社でこの褒め褒めアプリを起動してしまった自分のアホさが何よりも痛い。

それに『姫』と呼ばれたいのではない、褒められたいだけだ。

好きな声とセリフが掛け合っているものを選んだら、たまたま呼称が『姫』になってしまったのであって、そこにこだわりはない。

そんなことを説明できるはずもなく、菜々美は隆康が淡々とキーボードを打つ音を聞いていた。仕事を進める彼の隣にいと、段々と冷静になってくる。結局、菜々美は仕事をしていない。

手伝おうにも動揺はまだ収まっておらず、足を引っ張りそうな気がして、やりますとも言えなかった。

「お任せしてしまって、申し訳ないです」

「そう思うなら、そんなのを聞いている理由でも教えてくれ」

「えええ……。会社ではちよっと……」

どこに耳があるかもわからない。これ以上の危険は冒せない、と菜々美が用心深い態度を取ると、隆康はディスプレイから菜々美へと目を向けた。

「会社じゃなければ、理由を話すって聞こえるぞ」

頬杖をついて苦笑している隆康に、菜々美は急に色気を感じてしまう。節が出た手首、長い指、ヨレのないネクタイに、男らしい喉仏。

菜々美は自分の視線が無遠慮に隆康の上を彷徨ったことに、頬を赤らめた。

「黙っていてももらえるなら、いくらでも、話します」

急に渴いた喉を潤すように、菜々美は生唾を呑み込む。隆康は腕を組んで、椅子の背もたれに背中を預けた。

「なるほど。なら、焼き鳥屋でどうだ」

「焼き鳥って、隣の人と席が近いでしょう。話が誰かに聞こえるじゃないですか」

菜々美は信じられないとばかりに隆康を見る。会話が途切れれば、横の人に話が聞こえてしまう距離の店は嫌だ。

「……話が聞こえない場所。ホテルにでも行かないと、無理だろ」

「ホテルのラウンジは、静かすぎます」

ホテルのラウンジはプライベートスペースこそ広くはあるが、いかんせん夜は静かだ。

菜々美が真顔で答えると、隆康は堪えきれないとばかりに笑い出す。今まで彼が声に出して笑ったところなんて見たことがないだけに驚いた。

そもそも、菜々美は他の女子社員と違って、隆康を理想の男性として意識したことがない。

隆康は、彼と親しくなりたい人に囲まれている、遠い人だ。彼はアイドルで、菜々美はそれを横目を通り過ぎる通行人という関係性。

それが、どうしてこんなに親しく話しているのだろう、と不思議な気持ちになった。

理由は褒め褒めアプリの利用を知られたからだ、と現実に戻ると気持ちがずんと暗くなる。

「なら、個室の焼き鳥屋だな」

「どこでもいいです。黙っていてさえもらえれば」

むしろ、理由も聞かずにただ黙っていてくれれば、それが一番ありがたい。

「どこでもいい、なんて軽々しく言わない方がいい」

今までの会話の中で、初めて聞いた、窘める口調。

驚いた菜々美が隆康を見ると、彼はディスプレイに視線を移し、すでに仕事に戻っていた。

確かに、どこでもいいと言って昆虫や爬虫類を出す飲食店に連れて行かれるのは、さすがに遠慮したい。

菜々美が反省していると、隆康は「でも、」と続けた。

「その『どこでもいい』は、取っておくことにする」

「取っておく」

意味がわからず、菜々美は首を傾げる。

「焼き鳥は、この仕事を俺一人で行ったことへの対価。』どこでもいい』は『姫』を黙っておくた

めの、交渉の場とでもしようか」

理由を話せば黙ってしてくれる、と言うから、社外で話すという話ではなかったか。

「な、なんか、こう、ぐちゃっと、ぐちゃっとされた気がするんですけど」

「交渉とは相手を煙けむに巻くことだろう。『どこか』を決めるのは、俺。どうする、呑むか呑まないか」

「黙っていてくれるなら、なんでもいいです……」

「なんでもいってのもまた、あれだな」

隆康が苦笑すると、複合機プリンタから印刷した用紙が出てき始めた。

「え、もうできたんですか」

「雛形があつたじゃないか」

「初めてこの見積書を見るのに、すごい……」

「このデキが違う」

「それは知ってます」

自分のこめかみ辺りを指でトントンと叩いた隆康を置いて、菜々美は椅子から立ち上がった。出てきた書類を揃えて、目を通しながら席に戻る。

「あとは私がチェックしますので、部長は飲み会へ行かれてください」

「二人で終わらせて、飲み会に顔を出さず」

「えええ……」

部長と二人で飲み会に登場だなんて、そんな針山に裸足はだしで登りに行くようなことはしたくない。女の嫉妬の世界は深く怖いのだ。

隆康は笑みを浮かべたまま、肩を竦すくめるふりをする。

「よくそこまで嫌な顔を、本人の前でできるな」

「ご自分がどれだけモテてるか、認識された方がいいですよ」

「あれは、俺に興味があるんじゃない。地位や金が好きなんだ」

隆康が菜々美に手を伸ばした。プリントした見積書を渡せ、ということなのはわかる。けれどすぐに渡せなかった。

実は、会社での隆康の後ろ姿に孤独を感じたことがある。

あれは隆康が冷静に俯瞰ふかんして自分を見つめているからなのだろうか。

隆康を温もりのある人間として初めて意識をして、だからつい聞いてしまった。

「……部長にも、人に知られたくないことって、ありますか」

「ある」

褒め褒めアプリよりも知られたくないことなんて、そうそうないだろう。それでも、ちよつとした期待を込めて、聞いてみる。

「何を、知られたくないんです？」

菜々美はプリントした見積書を隆康に渡して椅子に座った。

「姫と呼ばれた理由を教えてください、教えるよ」

「姫って言わないで……」

隆康の穏やかな声に、菜々美に平常心が戻ってくる。時計に目をやると、まだ飲み会には間に合いないような時間だった。

けれどまだ仕事は終わっていない。

隆康の仕事に真剣な横顔と、くつきりとした喉仏が、瞼の裏に焼き付く。彼の唇が動いた。

「読み合わせをするぞ」

「はい」

部長がモテるのは地位とかお金ではないと思います、と伝えるには、関係が遠い。

いつもは電話や話し声でうるさいオフィスだが、今はそれも無い。心地よく響く隆康の声が素敵で、何度も聞き惚れそうになった。

文字通り二人きりだが緊張はしない。仕事という言い訳が自分を守ってくれていた。

見積書の読み合わせを終え、ほっとして背伸びをしていると、パソコンの電源を落とした隆康が立ち上がる。

「飲み会にはまだ間に合うだろう。一緒に行こう」

個人主義、と言われる世代で育ってきた自覚がある。

同じく人は人、自分は自分という世界で誰よりも生きていそうな隆康に「一緒に」と誘われたことがこそばゆく感じた。

女子社員に睨まれるかも、と思ったが、考えが変わる。

そもそも、自分がライバルとして意識されると思っていること自体がおこがましいのだ。そう考えると、楽になった。

菜々美は髪を束ねると、仕事に気持ちを切り替えて丁寧に頭を下げ、顔を上げる。

「本当にありがとうございます。ご一緒させていただきました」

「ああ」

隆康の表情にさっと翳が宿って、消えた気がした。

一瞬のことだったから、きつと見間違いだらう。

二人で居酒屋へと向かい宴席の中へ入ると、隆康はあつという間に中央へと引つ張られ、用意されていた主役席に座った。

菜々美と一緒に来たのは見間違いですよ、というように存在感を殺し、同僚の木村亜子が手招きしてくれたテーブルの端の席に滑り込んだ。

すでにお腹も満たされ、お酒も入った面々は、それぞれ小さなグループになって喋っていた。だが、部長に近づきたい人たちはそわそわと彼の周りに集まり始めている。

これが、隆康と自分との距離だ。

菜々美は亜子に料理を皿に取り分けてくれたことの礼を言いながら、箸を手を持つ。

「お疲れ」

亜子がウーロン茶を頼んでくれた。だが、それが来る前に、なみなみと日本酒が注がれたグラスを渡される。

勧められるまま、日本酒を飲んだ。喉が焼けるような感覚とともに、甘い芳香が鼻に抜ける。途中から参加をすれば苦手な乾杯のビールを飲まなくてもいいらしい。途中参加がクセになりそうだ、と思いつながら、また一口飲んだ。

「飲み会を無視して帰るのかと思ったら、部長殿と一緒に登場とはねえ」

「アクシデントが起こっただけ」

残業の理由をかいつまんで話すと、亜子は微妙な顔をしたが、もう終わったことだ。

ひと仕事終わった後の週末だからか、やけに日本酒が美味しい。だし巻き卵を箸で割って、大根おろしを乗せて口に入れる。お皿の料理はどこどこなくなっているが、こういった酒のつまみがあれば十分だ。

自分のペースで空腹を満たしていたが、亜子が肘をつけてにやにやとこちらを見ているので、箸を止めた。

「何か言いたいのなら、どうぞ」

「幸せそうなのは、食事とお酒のせいだけかな。ね、部長とお近づきになった感想を聞かせて」

亜子には隆康と一緒に来たから機嫌がいいと思われる。

口の中でじゅつと出てくる出汁^{だし}と大根の苦味を味わいながら、すでに遠い人となった隆康を眺

めた。

「近づいてないと思うけど」

指で、隆康と自分を交互に指す。いろんな人に囲まれた彼は本当にアイドルだ。

「そうかな。なんか、仲良さげに見えちゃったんだけど」

「気のせいだよ、それ」

自分の重大な秘密を握られた。あの音声を聞かれたことは、脇から変な汗が出て震えるほどに恥ずかしい。

それを秘密にしてみらうために二人で食事に行く約束をした。

どれだけ自分が取り乱していたかが、時間が経つほどにわかる。

冷静になってくると、上司がわざわざ部下の秘密をバラして、管理者としての自分の首を絞めるようなことをするだろうか。菜々美は溜め息を吐く。

やはり、食事の話は彼の冗談なのだ。

真に受けた自分ますます恥ずかしくて、菜々美は情けない顔をした。

「……ねえ、亜子から見た部長って、どんな人？」

「クールなイケメン。色気と堅さが混じった、ワイルド感。引き締まった肉体に、趣味のいいスーツとネクタイ」

「……そういうのを求めたわけではないんだけど。ウーロン茶でも飲む？」

仕事の姿勢とか性格の印象を聞いたつもりだったが、予想もしない返事が返ってくる。

運ばれてきたウーロン茶を渡そうとすると、亜子に拒否された。

「私も部長と二人きりで話したいって意味ですけど」

「え、まったくわからなかった」

菜々美は驚きつつ再び箸を取る。

少しだけ炙ったサバに、レモンと塩がかかったものを口に運んだ。日本酒の風味とよく合って、にんまりとした笑みが浮かぶ。

横を見ると、白ワインを飲んでいる亜子が、うつとりと部長を見ていた。

「部長って、整いすぎてて、一般人には鑑賞用だね。そして、見て。あの恥も外聞もない、純粹なフリをした、頭の悪い女を」

「毒舌を慎もうか」

呆れつつも隆康の方を見れば、いつの間にか横にちゃっかりと萌咲が座っている。

甲斐甲斐しく焼酎のお湯割りを作っていた。仕事はあれだが、そういう気は回るらしい。

それよりも、残業を手伝う原因となった萌咲の作った酒を、隆康が飲んでいることに驚いた。大人げないかもしれないが、自分なら受け取らないと菜々美は思う。

胸の中にまずもやもやが広がって、それからすんと、隆康が仕事を手伝ってくれた理由に納得がいった。

彼は、新人の萌咲『も』助けたかったのだ。

自分だけを助けるために残ってくれたと思っていた。

ポジティブな勘違いにさらに恥ずかしさが湧き上がり、菜々美は身震いしながらお酒を飲んだ。

「気が利くのは、いいことなんじゃないの」

「菜々美がアレをすると、男は勘違いするからやめた方がいいよ」

「急になんの話よ」

刺身のつまを青じそでくるんで、しょうゆをつけたところだった。つまが、しょうゆの色に染まっていくのを見つめつつ、亜子の言葉に眉を顰めた。

「日頃、そういうことをしない女がしてみなさいよ。俺って本命かも、みたいな幸せな勘違いをするでしょうが。男ってそういうものじゃないの」

とても演技には見えない真に迫った亜子の迫力に、そういう経験でもあったのかなと思った。

「……何かあったのなら、話を聞くくらいならできるよ。力にはなれないと思うけど」

「話はいい。力にはなれる」

急に食い気味に言葉尻に被せてきた亜子の勢いに引く。

「えええ、何？」

「好きな人に、合コンを頼まれたの。でも、合コンなんてしたくないわけ。だって、私の本命を誰かが狙ったら嫌だもの。だから、四人くらいでの食事がベストだと思って」

「力になれず、申し訳ない」

一言で切って捨てる。安全パイな存在が必要という気持ちはわかるが、そんな場で気を使うよりも、家でイケボイスを聞く方が有意義だ。

菜々美はしょうゆで黒くなったつまを口に運び、グラスに残っていた日本酒をくいと飲み干した。

亜子はめげずにぐっと寄ってくる。

「そのクールさが必要な。人の恋を手伝うと徳を積むことになるよ。友人代表スピーチとどっちがいい？」

「スピーチがいい」

「え、そっちなの」

「簡単なもの」

二対二の、しかも初対面の男性との食事よりも、スピーチの方がまだいい。事前に練習することができるし、何度でも練習できる。

そう考える自分は少し変わっているのだろう。

話題が切れたところで周囲を見回すと、目の前に座っている四十手前の篠田しのだが、自分で焼酎のお湯割りを作ろうとするとするところだった。

菜々美が気負うことなく喋れる数少ない男性社員の一人で、仕事も教えてもらった大事な先輩だ。萌咲が隆康にお酒を作っていた光景が、菜々美の頭の中を過る。

「篠田さん、作ります。お世話になっているし。いつもこういう気が利かなくてすみません。作ってもいいですか」

酒飲みには好みの濃さがある。それが理由で、人によっては自分で作ることにこだわる場合が

ある。

そんな菜々美の心配をよそに、声を掛けられた篠田は目を丸くした後、頭を掻く。

「せっかくだから、お願いしようかな」

「濃さはどれくらいにしますか」

驚きつつも任せてくれた篠田に菜々美は微笑んだ。こころへん、とグラスに指差されたところまで焼酎を入れて、丁寧にお湯を注ぐ。

陶器のグラスに手を添えて篠田に渡すと、彼はとても嬉しそうに破顔した。

「いつもよりうまい気がする」

気が向いたから声をかけただけなのに、とっておきのお酒を開けたような表情を向けられて、菜々美の方が恐縮する。

篠田もお酒が好きで、たくさん飲むというよりも味わう派だ。

まだまだ仕事で助言をもらうことも多いけれど、独り立ちした今は酒の肴さかなについて語り合う仲間になっていた。

篠田とお酒の話をしていると、どこからか強い視線を感じてその元を探す。

すると、隆康の隣にまだ座っている萌咲と目が合った。彼女の口元に浮かぶ、勝ち誇ったような笑みに、菜々美はさすがにムツとする。

飲み会に遅れて参加した理由を思えば、目を逸らしてなるものかと妙な闘争心が湧いた。

気迫を感じたのか、萌咲の方がさっと目を逸らす。

その横にいる隆康は、萌咲に半分背を向ける形で、隣に座る課長の砂野すまのと話していた。

なぜか胸にぼつかりと穴が開く。隆康との残業は夢か幻だったのではないかと感じるほどに、すでに過去だ。

「ほら、菜々美も飲んで」

亜子がいつの間にか頼んでくれていた日本酒のおかわりが運ばれてくる。

酔わせて、合コンに参加させようとする、古典的な手段を取ろうとしているらしい。

菜々美はなみなみと波打つ日本酒の水面を見つめる。

隆康と一緒に飲み会に来たのは不可抗力だ。あんな風に萌咲に挑まれる覚えなんてないし、第一、感謝の言葉も聞いていない。そもそも、砂野は菜々美が代わりに見積書を作り直した件を彼女に伝えていたのだろうか。

萌咲に感謝を求めた自分への自己嫌悪も加わり、ムカムカしてくる。

その感情で妙な弾みがついたのか、コンパに行ってもいいかなという気になった。

「コンパに行くのはいいけど、愛想はゼロだよ」

「ありがたい。菜々美は天然だから大丈夫」

どういう意味よ、とねめつけるも、亜子はさつそくスマホで誰かにメッセージを送り始めていた。

菜々美は褒め褒めアプリのイケボイスを隆康に聞かれたことを考えていた。

まだ、恥ずかしいのは確かだ。

けれど、隆康にとってはきつとたくさん抱える部下の一人の、些細な秘密を知っただけ。

どう考えても取り乱した自分がただただ空しいという結論に行き着くから、心は落ち着かない。

自分の気にしていることは、他人にとっては案外どうでもいいことなのだ。理解はできるけれど、胸はちくりと痛む。

やっぱり、イケボイスで自分の機嫌を取っている時間が一番、尊い。

菜々美はちびちびと、日本酒を飲み続けた。

週末は掃除に洗濯と忙しい。家族と住んでいるといっても、お弁当の材料の買い出しやストック作りは自分でする。

とはいえ、そんな時間もイヤホンでアプリを聞くのだから苦ではない。むしろ、楽しい時間だ。

この『楽』の時間で満たされた心が、月曜日からの自分を作るといっても過言ではない。

涙ぐましい努力で気持ちをリセットして月曜日に出社をすると、待ち構えていた萌咲から頭を下げられた。

驚きすぎて、菜々美は一步後退してしまう。

「金曜日はせっかく教えてもらったミスを放置して、すみませんでしたー」

言葉の中に、不服そうな雰囲気は嗅ぎ取れた。

きつと誰かに言われたから頭を下げに来たのだろう。しかし偏見で決めつけてはいけない、と思

い直し、菜々美は笑みを顔に貼り付ける。

「部長が手伝ってくれました。完成させたのは部長だから、私にお礼はいいです」

萌咲は神妙な顔で固まった。もしかして、飲み会の日に隆康本人から直接注意をされたのだからか。

フロアに彼の姿を捜すが、見当たらない。確かめたくなくなって萌咲にかまをかけてみる。

「舛井さんが反省していたこと、部長に伝えた方がいいですか」

「伝えてください」

萌咲の顔がぱつと輝いて食い気味に言ってくる。やはり隆康は、金曜日に彼女に注意をしたのだ。そんな雰囲気には見えなかったから、意外に思った。

「言っておきますね」

「ありがとうございます！」

萌咲がここまで頭を下げてきたのは初めてだ。よほど強く言い含められたのか、隆康が好きだからか。

二人のことだし関係ないか、と菜々美は考えるのを放棄して、約束だけをして自席に着く。

素直に謝られると、頼まれてもないのに見積書を確認したことに、改めて罪悪感を覚えてしまった。

けれど、萌咲の仕事なのだから、あとは上司たちに任せればいい。そう気持ちを切り替えて自分の仕事に集中する。

自分自身も書類整理や取引先への連絡、新しくなるハードやソフトのスペックについて確認をしなくてはいけない。

昼を過ぎた頃、ホワイトボードの予定表に隆康は出張と書かれていることに気づいた。出社は木曜日かららしい。

萌咲から謝罪を受けたことを伝えると約束した手前、早めに話したいが、出張中に社内メールを使って報告することには躊躇する。ただでさえ捌かなくてはいけないメールは多いはずだ。

やるべきことがひとつ増えたと思いつながら、忘れないために菜々美は『部長』と書いた付箋をパソコンの画面に貼り付けた。

待ちに待った木曜日になったが、隆康をオフィスで見かけない。

他の人に聞けば出社はしているらしく、どうやらお互いすれ違いになっているようだ。

仕事をしていたが集中力が続かなくなり、時間を確認すると午後三時だった。

窓から差し込む日差しを見つめた後、菜々美は休憩がてら自動販売機で飲み物を買うために立ち上がる。

オフィスを出た廊下の突き当たりに休憩コーナーがあり、違うメーカーの自動販売機が三機、置いてあるのだ。

ソファがそれを囲むようにコの字に設置してある。オフィスを離れて少し話したいときなど、ここを使う人も多いのだが、珍しく誰もいなかった。

菜々美は左肩を右手で揉みながら、カップのコーヒーにするかスポーツ飲料にするか悩んだ。

デスクの引き出しに、もらったクッキーとチョコレートがある。

コーヒーに決めて自動販売機にお金を入れるため財布を開けようとしたとき、後ろから声を掛けられた。

「近内さん」

誰もいないと思っていたのでびっくりして振り返ると、隆康が立っていた。金曜日に褒め褒めアプリを聞かれた相手のふいの登場に、内心動揺が走る。

あのことは、なかったことにしているのか。どう接するのが正解かわからず、距離感が掴めない。「お疲れ様です」

「お疲れ」

隆康が一步近づいてきて隣に立った。袖が触れ合うほどに近くなって菜々美は一步分離れる。あからさまな態度だったので彼の反応を心配したが、それ以上は距離を縮めてこなかった。

「……コーヒー休憩？」

「はい」

ボイスを聞かれた恥ずかしさがどんどん蘇^{よみがえ}って、心臓がどきどきと鳴り出す。

萌咲との約束を果たすなら今だ。最高潮の緊張を仕事用の笑顔に隠して、菜々美は口を開く。

「舂井さんから見積書の件で謝罪を受けました。私も出過ぎたことをしたと反省しています。先日はお忙しい中、時間を割^きいて頂き、ありがとうございました」

そう言って頭を下げたが、隆康の反応を窺^{うかが}うことはしなかった。

緊張で息苦しくて死にそうだ。

その場から動かない隆康は手に茶色の革カバーの手帳とスマートフォンを持っていた。これだ、と菜々美は指摘する。

「今から会議じゃないんですか。お時間は大丈夫ですか」

「ああ、会議だな」

相変わらずの低くていい声だがどこか不穏な響きがあり、おまけに立ち去ってくれない。

何か失礼なことをしただろうかと考えたが、アプリを聞かれた恥ずかしさが蘇^{よみがえ}ってうまく頭が働かなかった。

僅かな無言の時間に、胃と胸がぎゅうぎゅうと締め付けられる。

場の空気を軽くしたくて、菜々美はなんとか会話を続けた。

「すみません。舂井さんの仕事なので、あの後どうなったかは聞いていません。課長はご存じだと思います。進捗^{しんちょく}を追いかけた方が良ければ聞いてみますが……」

隆康が返事をしてくれないことで、どんどん身体に力が入って長財布を強く握りしめてしまう。

緊張から俯^{うつむ}いていると、耳元に息が掛かった。

「姫」

低音ボイスの囁^{ささ}きでの、からかい。耳から全身に震えが走り、顔を真っ赤にした菜々美が見上げると、隆康は片眉を上げて皮肉げな笑みを浮かべていた。

「ちよっ……！ 昼、会社、仕事ですよ！」

「焼き鳥の約束は反故か。そうか、誰かに話して欲しいんだな。近内さんの本当の欲求を汲み取れなかった。すまないな。今からの会議で話してこよう」

「なっ、どっ、だっ」

隆康の死刑宣告のようなセリフに、言葉にならない音が菜々美の口から漏れる。何がきっかけで彼がそんなことを言い出したのか、まったくわからない。

「か、管理職は、部下の、秘密を」

「個人名は出さずに、会議前の場を和ませる話題レベルで話そう。そうだな、残業中に姫と呼ばれるアプリを聞いて仕事をする二十代の女子社員がいるらしい、とでも言うか。うちもそういうアプリを開発案として挙げて、利用者からヒアリングを試みよう、と提案する。その女子社員が誰かわかれば、話を聞かせて欲しいから、皆に通達してください、なんて流れでどうだ」

「い、いじわる、ですよ」

そんな話題が出てもおかしくないのが怖い。趣味の分野は当たれば大きいし、そうでなくても一定の売上は確保できるだろう。

声を押し殺して涙目で睨みつければ、隆康は嬉しそうに頷いた。

「そう、その感じがいい」

「なんの話だか……っ」

握ったこぶしで、隆康を叩きたくなったが、ぐっと堪える。

「で、焼き鳥は今日か、明日か、明後日か。……俺のビジネスへの情熱が、部下への思いやりに勝

るのはいつか。俺は売上を上げることが好きだし、短気な性格であることも伝えておこう」

「きよ、今日！」

菜々美にとっては脅しにしか聞こえない。それなのに隆康は楽しそうだ。それが悔しくて再度睨みつけるが、彼には響かない。

「よし、今日だな。後で店のアドレスを社内メールで送る」

「え、本気ですか」

「本気だ」

そう言った隆康に菜々美は呆然とした。辺りに誰もいないか、頭をぐるりと回して確認をする。本当に、二人で食事をするつもりなのだろうか。かといって誰かを誘ってアプリの話が聞かれたら死んでしまう。

思い切り眉間に皺を寄せていると、隆康は小銭をコーヒーマシンの自動販売機に入れた。

「近内さん、コーヒーマシンのホットのブラックが好きだったよな」

「え、あ、はい」

隆康は菜々美が答えるより早く、ホットのブラックコーヒーマシンのボタンを押す。

甘ったるい飲み物は苦手だし、冷たい飲み物は水滴でデスクが濡れるから好きではないが、その話をした覚えはない。

取り出し口にカップが出てきて、コーヒーマシンが注がれ始める。隆康が会議に持っていくのだろうかと思う。

「冷や汗をかかせた詫び。じゃ、夜に」
「え」

そう言った隆康はエレベーターへと足を向ける。コーヒーはまだ注がれていて、はっとして早足で去る後ろ姿に声を掛けた。

彼は、奢ってくれたのだ。

「ご、ごちそうさまです。ありがとうございます」

振り返ることなく、隆康が右手を挙げる。そのまま会議室のある階まで階段で行くのか、非常扉を開けて消えた。

緩み始めた顔を抑えるために、菜々美は掌で額を押さえた。嬉しいと感じるこの心は、なんだろう。

「落ち着け……」

コーヒーを淹れ終わったという終了の電子音が鳴った。

今日は取引先への訪問がなかったので、服装は襟ぐりが広めの濃いグリーンのセーター、グレーのワイドパンツに、黒の五センチのポンプス。

控え目なゴールドのピアスを付け、髪はざっくりとまとめていた。

もっと、お酒落をしてくれればよかったと落ち込む。

窓に映った自分を見つめた数秒後、菜々美は「ああああっ」と震えた声を出した。

夜にあるのは、デートではない。アプリ使用の断罪だ。浮かれている自分を、誰か一喝して欲

しい。

「姫の誤解だけは解かないと」

自分にミッションを課して、コーヒーを手に菜々美はデスクへと戻った。

隆康からの社内メールに添付されていた焼き鳥屋の地図を、自分のスマートフォンに送る。そのメールには隆康の個人の連絡先はなかったため、菜々美も返事に書かなかった。

このIT時代にアナログな現地集合という形になり緊張は増す。

万が一にも行けなかったり遅れたりしたらバラされるかもしれないという恐怖も相まって、夕方に近づくとも胃がキリキリと痛んだ。

おまけに、約束の三十分前に着いた焼き鳥屋は、白の漆喰の壁に格子の引き戸という、なんとも上品な店構えだった。

四角行灯の看板のみの、メニューも出していない店の前に立ち竦む。

隣の人と席が近いと嫌だとか並べ立てた条件を隆康は覚えていてくれたのだろうが、上司に気遣わせ、店選びから予約まで任せてしまい、さらに胃が痛い。

財布の中身が急に心細くなり、コンビニでお金を下ろし、滅多に入れない大金を持っていることも緊張を高めた。

しかも、皆が憧れるイケメン上司に、処刑されるのだ。

なんだかよくわからない複雑な状況に、胃が痙攣して食事なんてきつと喉を通らないと思っていた。しかし、半個室の席で、菜々美は大きな声を出して口を押さえることになる。

「おいしい！」

出された料理は全ておいしくて、胃は心配なんていらなほど絶好調に動いていた。

ササミに梅肉とシソが乗った串は、中まで火が通っているのに、柔らかくて食べやすい。そして、日本酒に合う。

おいしい食事を前にすれば、凶太い自分が登場するらしい。

「それは良かった」

目の前で隆康がビールをグラスで飲んでた。イケメンの男らしい喉仏が上下するのを盗み見している自分を恥じつつ、菜々美はまた日本酒を飲む。

結局、店の前を何往復もしていたところを後から来た隆康に見つかり、引きずられるようにして、一緒に店に入った。

隆康の前では意識しないと『ちゃんとした』自分が出てこない。今更、取り繕っても無駄だどこかで観念しているのだろう。

「で、なんであんなのを聞いているんだ」

鳥皮の塩に七味をかけながら隆康がストレートに聞いてくる。目を合わせて聞いてこないのが、彼の優しさだ。

料理はコースを頼んでくれたので、頼まなくてもどんどん運ばれてくる。菜々美は振り返って、店員が来ないのを確認した。

「聞きたいから、聞いています」

「小学生の理由か」

隆康が眉根を寄せる。

自分の頑張りも、無理も、全部自分にしかわからないから。それを、人に理解してもらおうのは無理だから。人に褒めてほしいと望めば、とても寂しくなるから。だから、アプリに言ってもらっている。

そんなこと、口が裂けても言えない。言うと思うだけでゾツとする。

菜々美は顎をぐっと上げて、言い返した。

「聞きたくないものは、聞きません。飲みたいものしか、飲みませんし」

隆康は最初、菜々美にビールを勧めてきた。それを丁重にお断りして純米吟醸を頼んだ。

「なら、食事をしたくない相手とは、しないってことか」

食べ終わった串を竹の筒に入れながら、隆康が聞いてくる。

そういうことになる、気がした。菜々美が逡巡する僅かな間に隆康は結論付ける。

「俺とは食事してもいいって、近内さんは思ったってことだ。光栄だな」

「だって、部長が人に話すって脅すから」

「近内さんは本当に嫌なら、どうぞ、バラしてください、と言いそうじゃないか」

「アプリを聞いているのをバラしてください、なんて言いませんよ」
菜々美は反抗的な目遣いで隆康を見た。

「私は理由を答えましたよ」

「そんな理由なら、会社で話せば良かっただろうに」

確かにそうで、菜々美は言葉を呑み込む。

「理由は他にあるってことだ」

隆康がにやりと笑ったので、一瞬見惚れた。

端正な顔が眩しいくらい美しいのに、ウィットに富んでいて、さらに声までいいのだから反則のオンパレードみたいない人物だ。

余計なことを言わないよう、唇を巻き込むように口を閉じて黙っていると、隆康はビールのおかわりを頼んだ後、口を開く。

「俺は子犬が苦手だ」

「……は」

急に話題が変わって、菜々美は思わず聞き返した。

「話す約束だっただろう。近内さんが『理由』を話したら、俺も人に知られたくないことを話すって」

そういう話をしていたが、本当に教えてくれるとも思わなかったし、まさか子犬が苦手とは想像もしていなかった。

でも逆に信憑性がある気がして、菜々美はおずおずと聞く。

「理由というか、原因って……、聞いていいですか」

「ああ」

無意識に、菜々美は膝の上に手を置き、傾聴の姿勢をとった。

「小さな頃、抱いていたつもりだが落としたんだ。そのときの鳴き声が、こう、忘れられない」

柔らかい小さな身体を落としただけでもショックだったろう。キャン、と儂い声で鳴かれてしまえば、小さな子どもなら硬直するほどに、つらかったはずだ。

「死んだとかじゃないんだが、トラウマだな。それから、子犬も小さな犬もだめだ。大きな犬は比較的大丈夫だが」

「優しいんですね」

表情を少しだけ硬くして、抑揚もなく淡々と話す隆康に、菜々美はそう声を掛けていた。彼に真顔で見返されてしまい焦る。

「上からで、すみません。子ども心に、壊してしまいそうで怖かったのかと思って。大事にしたい気持ちの裏返しですよね。そういう気持ち、その子犬には通じていたと思いますよ。動物の方がきつと人より優しいから」

社長の親族で、有能で、イケメンで、会社の中で抜群に目立っている。歩く姿はいつも自信に満ち溢れていて。そんな人の繊細さに触れれば、好きになってしまいそうだ。

——今、自分は、好きになりそうだとか考えていなかったか。

隆康とずっと目を合わせていたことに気づいて、菜々美は慌てて目を逸らした。冷汗がたたり、と菜々美の背筋を伝う。

雲の上の人に好意を抱けば地獄が待っていると、気を引き締めた。

「優しいのは、慰めてくれる『姫』だろう」

「そ、それ！」

菜々美は椅子から立ち上がる勢いで、隆康に対して前のめりになる。

「姫と呼ばれたいわけじゃなくて、私が好きなセリフを言うものを選ぶと、姫と呼ばれるだけなんです。私が姫になりたいとか、そんなのではないんです」

「野菜の巻き串をお持ちしましたー！」

姫を連呼していたところで、店員がコースの料理を持ってきて、菜々美はその場に沈み込んだ。姫という言葉が絶対に聞かれた。恥辱と絶望から顔を上げることができない。

忙しそうな店員が去り、死んだ目で顔を上げると、隆康が堪えきれないとばかりに笑っていた。

「タイミング、悪すぎだろう」

「だって部長が姫とか言うから……っ」

恥ずかしいのに、それでもトマトやアスパラを豚肉で巻いて焼いた串はともおいしそうできたいのか笑いたいのかわからない。

「あと、近内さん、気を付ける」

「へ？」

部長が自身の胸元を指している。恐る恐る、菜々美は自分の胸元を見た。襟ぐりの広いセーターの胸元が、前のめりになれば、どうなるか。

「紫の、見えてる」

「……もう、部長は私のお父さんかお兄さんって思うことにします」

じゃないと生きていけない。菜々美は息も絶え絶えに目を瞑る。

濃い色のトップスを着るときは、濃い色の下着を身に着けることを密かな楽しみにしているのだ。よりよって紫の下着を着けていることまで知られてしまい、崩壊した精神はもう構築し直せない気がした。

「父か兄って、……他の選択肢はないのか」

「部長はアイドルで、私は通行人なんです……」

「なんだ、それは」

「お兄さんってことにしますから……。だから、アプリを聞かれても、下着を見られても平気……」
日本酒をごくごく飲んで、熱々のトマト串を食べた。こんなにもシヨックで辛いのに、豚の脂をトマトの酸味がいい感じに緩和してくれて、とてもおいしい。

「部長、やっぱりおいしいです」

菜々美が憔悴した顔で言う、隆康は噴き出した。

「わかったわかった。もっと食べてくれ」

隆康は串の皿を菜々美の方に寄せた。さらに、メニュー表を開いて日本酒の並ぶページを見せて